

[資料] 埼玉県川口市に残る 1923 年関東地震に関する記録

栄東高等学校* 荒井 賢一

栄東中学校 篠田 海遥**

The records of the 1923 Kanto Earthquake in Kawaguchi City, Saitama Prefecture

Ken'ichi ARAI

Sakae-Higashi High school, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City,
Saitama, 337-0054 Japan

Miharu SHINODA

Sakae-Higashi Junior High school, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City,
Saitama, 337-0054 Japan

As a continued study of the 1923 Kanto Earthquake in Saitama Prefecture we investigated the records written in the three memorial stones and several documents about the 1923 Kanto Earthquake in Kawaguchi City, Saitama Prefecture. At the time of the earthquake, present Kawaguchi City had been divided into two towns and eight villages. The rate of destroyed houses in old Shiba Village was higher comparable to old Kawaguchi Town. Old Kawaguchi town was called the one of the three major disaster areas in Saitama Prefecture. According to the Shiba Village History Book issued in 1937 by the village office, the number of destroyed houses and of the dead was 133 and 6, respectively. Because of warnings of aftershocks, people lived in their gardens and the bamboo forest for several days after the mainshock. The reported number of the evacuees from Tokyo was about three thousand. Description of the Kanto Earthquake in the Shiba Village History Book was concluded by warning of the need of preparing for future natural disasters. We will summarize the survey results with the goal of future disaster prevention.

Keywords: 1923 Kanto Earthquake, Kawaguchi City, Old Shiba Village, Old Kawaguchi Town

§1. はじめに

著者らはこれまでに、埼玉県内に残る 1923(大正12)年関東地震の記録の調査を継続してきた。石黒・他(2014)および石黒・他(2015)は、さいたま市内に建つ震災に関して記されている石碑および震災に関連する可能性を有する石碑(計26基)を調査した。また、荒井・他(2017a)および荒井・他(2017b)は、春日部市内に建つ石碑(計11基)の調査および春日部市郷土資料館に収蔵されている資料(震災当時の粕壁尋常小学校の児童たちが書いた作文集と旧粕壁町内の記録写真集)の調査に取り組んだ。さらに、篠田・他(2018)は、震災の体験者が記録として残した作文集『幸手町のかたりべ』の閲覧調査から、旧幸手町を中心とした幸手市における関東地震の本震及びその余震による影響、東京方面の被害、市内の震災からの復興について明らかにした。

内務省社会局(1926)等によると、前述の旧粕壁町(現在の春日部駅周辺)と旧幸手町(現在の幸手駅

周辺)に本研究の対象地域の川口市内に位置する旧川口町(現在の川口駅周辺)を加えて、それぞれ関東地震による埼玉県内の三大被災地と言われている。川口市(川口市立図書館)には、関東地震に関して具体的に記されている文献資料が多数残されている。本稿では、それらのうち震災のすぐ後に(1937年までに)記された文献資料を中心に、被害の状況や人々の行動、復興に至るまでの過程を、旧町村毎に記述する。また、震災に関連する石碑3基の調査結果も、合わせて記述する。

§2. 関東地震による川口市域の被害の概要

関東地震が発生した1923年当時、川口市(現在の市域)は、図1に示すように10の町村に細分化され、埼玉県北足立郡に区分されていた。川口市の旧町村毎の家屋の全壊数(率)、死者数、現在の気象庁

*〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77

電子メール : rikaken_sh@yahoo.co.jp

** 現所属 : 栄東高等学校

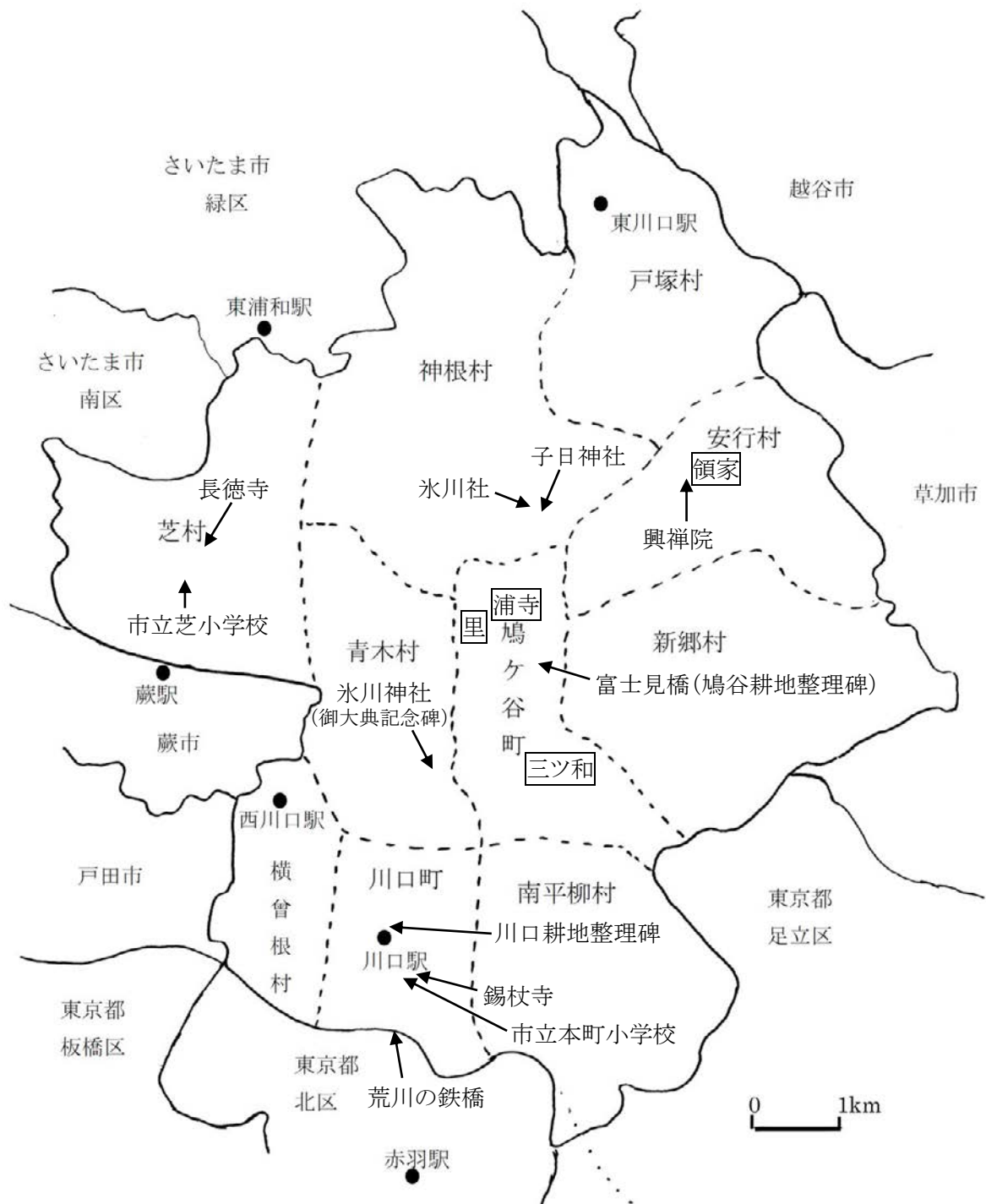


図 1. 川口市の旧町村の位置および本稿で記述をする寺社等の位置(およそ矢印の先端)や地区名
 Fig.1 Location of the old towns and villages in Kawaguchi City, and that of temples, shrines and area names described in this paper.

震度階級による本震の震度(それぞれ諸井・武村(2002), 諸井・武村(2004), 武村・諸井(2002)による)を, 家屋の全壊率が高い順に表1に示す. 死者数について, 表中で空欄になっている4つの町村では報告されていない.

表1. 旧町村毎の被害状況と本震による震度
Table.1 Damages in each old town or village and intensity scale of the mainshock.

旧町村名	全壊数/家屋数 (全壊率)	死者数	震度
芝村	132/559 (23.6%)	6	6強
安行村	104/532 (19.5%)	6	
川口町	488/2923 (16.7%)	10	
戸塚村	50/345 (14.5%)	2	
横曾根村	61/616 (9.9%)	2	
神根村	69/769 (9.0%)	6	6弱
青木村	29/643 (4.5%)		
鳩ヶ谷町	24/1118 (2.1%)		
新郷村	8/544 (1.5%)		
南平柳村	14/1054 (1.3%)		
合計	979/9103 (10.8%)	32	

埼玉県内の三大被災地の1つとされる旧川口町だけではなく, 旧芝村や旧安行村においても, 震度6強の揺れに見舞われた場所がある. 特に旧芝村では全家屋の4分の1近くが全壊している.

§3. 旧町村毎の調査結果

本章では, 旧町村毎に, 1923年関東地震に関する記録の調査結果を記述する.

3.1 『芝村誌』に記された旧芝村の被害と教訓

小泉安太郎氏によって1937(昭和12)年に記された『芝村誌』(小泉(1937))には, 「天變地異」として, 1703(元禄16)年の元禄地震以降の旧芝村に被害をもたらした地震や水害の記録が記されている. 諸言によると, 当時旧芝村の役場に在職していた小泉安太郎氏は, 郷土愛がたいへん強い人物であった. 自ら村内を歩き尽くしたり文献を調べ尽くしたり, 村の起源や沿革を探究しようと努力を重ね, 自治体史としてこの村史を出版した.

相当な被害があった1855(安政2)年の安政江戸地震以来の大地震として, 1923年関東地震による被害について, 次のように記されている. 旧字体で出力できない文字は新字で記述する. それ以外は原文のまま記述する.

扱又、大正十二年九月一日には、安政以來の大地震があり、其の区域は、一府六縣の廣きに亙り、其の被害は甚大にして凄慘を極め、就中、東京、横濱は、之に火災を伴ひ、滿目荒涼たる焦土に化し、人畜の死傷累々として算なく、親を喪ひ妻子に離れ、其の甚しきは、一家を擧げて全滅の悲運に遭遇したもの、又九死に一生を得、辛ふじて難を避けたるも、飢えて食するにもの無く、渴して口を濕ほすことも出來ず、宛ながら生地獄、一面又流言蜚語各所に傳はり、人心更に恟々極度の不安に陥り、九月二日遂に戒嚴令を布かれた。

吾が村も火災こそ無けれ、震災激甚で、今茲に當時を回想すれば、朝來降雨があつて、午前十一時頃一寸晴れ間を見せ、再び薄曇りとなり、何となく世間が、無氣味の雰圍氣に包まれた。然るに十一時五十八分、突如として鳴動、上空に震撼すると同時に、地震ふこと數回、全潰、半潰、随所に起り、人は轉倒して地に倒れ、溝に轉がり、阿鼻叫喚の巷と爲つた。編者は此時、役場に在つて、舎外に跳ね出された時、轟然たる大音響と共に、學校の一棟が崩潰した。此の日、暑中休暇後の授業始めであつたから、又幸に放課後であつたから、事無きを得たが、尙ほ女先生三人は居残り、夫れが間一髪にして難を遁がれた。自分は愴惶役場を出で、大門先より望めば、峰町の家並みは處處疎になつて居るのが見えた、漸くにして家に歸れば、分家の豊吉の宅は全潰して、妻子は家根の下敷になつて居ると聞き、直に飛び込んで、近所の人達と梁間を潜り、搜索すれば、無慘や小供を脇に抱へて妻は、既に事切れて居た。其の他、附近全潰數棟、幸ひ他に死者は無かつたが、負傷者は相當にあつた。

日は既に夕方になり、東京方面に立ち昇る一種の妖雲は、是ぞ大東京の大震大火災である。自分は再び役場に引き返し、取り敢へず救助米を各区に配附し、一方郡役所に救助の急報を發した。

餘震は間斷なく起り、當夜は勿論、翌日より連日に亙り、庭又は竹林に假小屋を掛け寝食を續けた。其の餘震の最中、警鐘の乱打は何事ぞ、這是、東京の震火災は、朝鮮人の放火であつて、其の鮮人が東京を追はれ、今しも此の村に押し込み來るとの報である。左なきだに昂奮しつゝある人人、此の警鐘を聞き、各戸の壯丁、吾れ先きにと凶器を携へて出動し、夜を徹して之れが警戒に當つた。

偶々郡役所より吏員役場に來り、被害状況を調べ

つゝあるところ、又々警鐘の響きに、其の吏員もワイシヤツの儘、風間方面に走せ付けた處、其の容貌と風彩、却つて鮮人と怪まれ、彼れ百方辯疏すれども聞かれず、漸く口辞を盡して、役場に同行を求め、初めて郡吏なることを承知して退散したる等の如き、殺氣横溢、遂に自警團を組織し、専ら之れが警衛に當ることゝなつた。而して一方、東京の避難民は、東北本線の汽車に鈴成りとなつて地方に落ち延び、陸路は、蕨、及至鳩ヶ谷街道を、北に北にと殺到し、吾が村も、親戚縁者の避難民三千人と註された。

斯くして、餘震は約一週日に亙り、人心尚ほ恟々たる中、役場は吏員總出動にて、被害状況を調べ、其の第一回の発表は、民家全潰百三十三、半潰百二十六、死亡六、負傷十二、學校全潰一、寺院全潰五、半潰一、工場全潰五、その他土木工事では、堤塘三ヶ所、樋管一ヶ所、水路七ヶ所、橋梁六ヶ所であつたが、第二回第三回と、調査を重ねて、最後全潰四百有餘棟となつた。是れが爲め、罹災者の救助は、人員にて八百三十一人、救助米にて二十一石八斗、味噌二百十八貫、救助日數八日間に亙つた。畏くも攝政宮殿下より、御内帑金御下賜あらせられ、其の金額は全潰者一千六拾四圓、半潰者五百四圓、死者九拾六圓、負傷者四拾八圓、計一千七百拾四圓を傳達された。

其の外、各府縣篤志者より寄贈を受けた、木綿裏地及長襦袢、その他日用雜貨類、山と積まれ分配せられ、尚ほ外國より毛布百四十七枚を寄贈せられ、罹災者資産の状況に依つて分配した。而して特に記すべきは、谷田、木崎、三室、尾間木、及白子町の消防組が、連日辯當持參で、學校其の他、倒潰家屋の跡片付に出動せられたことは、永久に忘れることの出来ない思出である。

又此の震災に付き、吾が村の美談として、郡長より賞辭を受けたのは、左の人々である。

(13名の氏名が記されている)

大正十二年九月一日ノ震災ニ際リテハ、芝村ハ川口ニ次グ激甚地ニシテ倒潰家屋三百二十四棟ノ多ニ達シ、半潰又二百二十五ヲ算ス、此ノ時ニ方リ危険ヲ冒シ潰家ニ突入シ、人命救助ニ努メ、本多興三郎以下九名ヲ救ヒ出セリ、其ノ勇敢ナル右十三名ノ行為ハ、實ニ他ノ模範ナリト云フベシ云々。

以上大震災に當り、畏くも 攝政宮殿下、深く宸襟を悩まし賜ひ、九月三日を以て、優渥なる御沙汰書、竝に内帑の資を賜ひ、更に同月十二日を以て、戊申の大詔を渙發せられた。

吁々、咽元過ぐれば熱さを忘る、指を屈すれば十有四年、さしも深刻なりし記憶も、いつしか解消せらるゝの有様、況んや前期先代の災厄は、今は談にする人さへ稀である。

由來、天災地殃は人力の及ぶところにあらずとは言へ、平素勤儉力行、萬一に處するの覺悟あらしめば、又以て自然の脅威も滅殺し得るものと思ふ。

地震(本震)当日の発生前の状況や発生時の様子から旧芝村内の詳細な被害状況、繰り返し発生して数日間続いた余震や各地で巻き起こった流言飛語の問題がこの村でもあったことが容易に分かる。被害状況について、川口市芝地区震災対策推進協議会(1980)、『芝村誌』の記述が抜粋され、一部に注釈が付されている)より、「學校全潰一」は現在の川口市立芝小学校と考えられる。また、「寺院全潰五」のうち1つは、沼口(1989)による記述より、倒壊した長徳寺(所在地は川口市芝 6303)の座禅堂(1986(昭和 61)年に再建)であると考えられる。さらに、「堤塘三ヶ所」には、見沼土地改良区(1988)の「大正拾貳年震災復旧工事一覧」の記述から、柳崎の河岸と堤防および芝の河岸が含まれる。「全潰」の数に関して、「第一回」として発表された133(諸井・武村(2002)とほぼ一致)から、調査を継続して最後に発表された全潰数は400余りと大幅に多くなっている。遠隔地などの調査が進み後になって被害が判明した可能性がある一方、調査や報告の時期は明らかではないが、本震では全壊にまでは至らなかったものの、繰り返し発生した余震によって全壊に至った可能性が考えられる。

国や周囲の町村からの支援を受けながら、甚大な被害を受けた旧芝村の村民自身が、復旧・復興に前向きに取り組んだ経緯が読み取れる。つまり、自助・共助・公助がしっかりと成り立っていたのである。

『芝村誌』の関東地震の記述の最後に記されている、「震災は時間が経つと忘れ去られてしまうことへの警告」と、「日頃からの備えにより減災が可能になること」は、現代を生きる我々も常に意識をしておきたい。

前述の川口市芝地区震災対策推進協議会(1980)は、大地震の恐ろしさを知らない若い世代へ震災の教訓を伝える目的で座談会を開催し、その内容をまとめた資料である。また、1980(昭和 55)年に川口市の芝地区に住んでいた21人が書いた震災の体験談も掲載されている。

3.2 『北足立郡大正震災誌』が物語る旧川口町の被害と耕地整理碑に秘められた復興

旧川口町における関東地震による被害や救援活動に関しては、当時の埼玉県北足立郡役所が 1925 年に発行した『埼玉県北足立郡大正震災誌』(埼玉県北足立郡役所(1925))に、詳細が記されている。埼玉県北足立郡(1981)として、1981年に復刻版が 300部発行された。「北足立郡震災状況」の「震災被害概況調」として、次のように記されている。

郡吏員を急派し調査せしめたるに川口町最も被害激甚にして住宅工場其の他建造物の倒潰甚だ多く加ふるに死者十数名を出し六辻村、新田村、蕨町、草加町、安行村、戸田村、尾間木村等之に次ぎ殊に大宮町に於ては鐵道省煙突山丸製系(「糸」を誤って「系」と記したと思われる)工場の倒潰により死者二十六名負傷三十餘名の悲惨事を出し其の他各町村に於ても鴻巣町を除くの外悉く震害を被れり然れども火災の之に伴はざるは洵に不幸中の幸なりと謂ふべし
要するに郡の東南に属する低濕の地に被害著しく北部及高燥なる地帯に被害尠かりき

旧川口町は、古くから鋳物業がさかんで、多くの工場が立ち並んでいた。川口市商工会議所(2006)等によると、地震の揺れによって工場の倒壊はあったものの、9月1日は工場の炉を休める日であったため、火災の発生はほとんどなかった。また、「震災救護并に救護の状況」の「震災激甚地川口町に於ける救護施設の状況」に、次のように記されている。出力できない旧字を新字で表す以外は原文のまま記述する。

九月一日大震災の襲來に依り町内家屋の倒潰人畜の死傷多數に上れり其の慘狀實に言語に絶す
震災直後川口町役場門前に焚出場を開設し罹災民に對し當日夜食より三日間焚出救助を行ふ其の戸數三百八十六戸人員一千七十八人續て食品救助、小屋掛救助を施行す一面本縣に於て九月一日より七日間本町に焚出場を二ヶ所設けて京濱罹災民の救助を行ふ役場吏員は罹災者の救護事務に忙殺中特に二名を縣の焚出場に派遣して應援せしめ物資の供給を始め各般の用務を處辯し又焚出の外に罹災民救護の爲川口劇場外六ヶ所に避難所を設けて罹災民を收容し救助并に救護事務を遺憾なく遂行せり此間に於て鮮人問題起りて人心恟々として不安の念日一日と高まり何時如何なる變事を惹起するやも計り

難きを慮り同町在郷軍人分會并に消防組員と協力して治安維持に努め且赤羽工兵隊兵員の派遣を請ひ續て戒嚴令を布かれて軍隊の出勤に依り稍や鎮靜を見るに至れりと雖も京濱地方の罹災民は晝夜の別なく陸續として押寄せ來り是等に對し焚出救助給水醫療避難所の收容等役場吏員は町内區長代理者又は町會議員等と共に徹宵三週間に亘り懸命の活動を繼續せり而して本町の震災に因る住家の倒潰一千百三十九戸非住家三百八十二戸に及び又死者十一名負傷者四十四名を算する慘狀を呈す食品救助を爲したる者二千二百八十戸人員九千七百七十一人小屋掛救助を爲したるもの八百四十戸人員三千五百九十二人避難所七ヶ所に收容したる人員一萬二千六百三十五人當町緣故者に避難したる京濱避難者一萬七千四百人にして本縣に於て焚出救助を行ひたる人員實に十五萬人の多きに達せり

又本町の生命たる鑄物工場は震災の爲め倒潰せるもの三百七棟の多きに上りしを以て當路者と協議し一日も速かに之れが復舊を圖り生業者の救済を爲すに非らざれば由々敷大事を醸すに至るべきを慮れ直に復舊材料を蒐集する方法を講じ東京府并に大阪方面に役場吏員を簡遣し極力奔走の結果復舊材料たる浪板平板(亞鉛引鐵板)は豫期以上に速達し爲に當業者をして事業休止の期日を少なからしめ且つ縣より低利資金貳拾萬圓の融通を得て鑄物工業を復舊せしめ從つて失業者の救済を速かならしめ得たる等震災直後より五十日間に於ける役場吏員の活動盡力容易ならざるものあり

極めて甚大な被害を受けたにもかかわらず、地震の直後から炊き出しを行い町民の食料を確保しようと努める町役場の動きは、旧川口町の復旧への大きな原動力となっていた。町内に計 7 か所の避難所を開設し、流言飛語にも動揺せず避難民の救助を継続したことや、東京方面からの多数の避難民まで受け入れたことは、町の特筆すべきすばらしい対応である。川口市商工会議所(2006)によると、赤羽と川口との間では、東京都と埼玉県の都県境を流れる荒川にかかる鉄橋も被害を受けたが、本震から 3 日後には応急修理され、屋根の上まで避難民が乗った列車が当時の川口町駅(現在の川口駅)に到着した写真記録が残っている。

また、就業者の生活を守ろうと、倒壊した 317 棟の鑄物工場を 1 日でも早く復旧させるために、埼玉県から金融面の支援も受けながら工場の再建に必要な資

材を早急に確保できたことが、旧川口町の復興につながった。

沼口(1979)によると、震災の翌年(1924(大正 13)年)には、川口町駅の周辺地域で耕地整理が始められ、1930(昭和 5)年に完了した。1931(昭和 6)年 1月に「川口耕地整理碑」が建てられたことも記されており、川口市教育委員会(1977)を参照し、石碑が建てられたとされる川口市栄町 3 丁目の公園を探したところ、公園も石碑も見つからなかった。川口市教育委員会文化財課にお伺いしたところ、公園は開発によって取り壊され、石碑はその後、川口市栄町と幸町の境界付近(幸町側、JR 線の線路沿い)の空き地に移設された(図 2-a は、川口市教育委員会文化財課から提供して頂いた移設後の石碑(正面)の写真)。その情報を基に現地を訪れたところ、石碑を見つけることができたものの、石碑は藁に覆われ、またフェンスで囲まれていたため、近づいて碑文を読み取ることは不可能であった。そのため、フェンスにも絡みついていた藁を取り除き、写真(図 2-b)に記録した(2019 年 4 月 11 日に撮影)。図 2-a より、石碑正面の上部に、碑銘「發祥致福」が(旧字体で)記されていることを確認できた。川口市教育委員会文化財課の方によると、関東地震による震災からの復興のために耕地整理がおこなわれたことが言い伝えられているそうである。



図 2-a. 川口市教育委員会文化財課から提供して頂いた川口耕地整理碑の写真

Fig.2-a The photograph of the memorial stone presented by Kawaguchi City Board of Education.

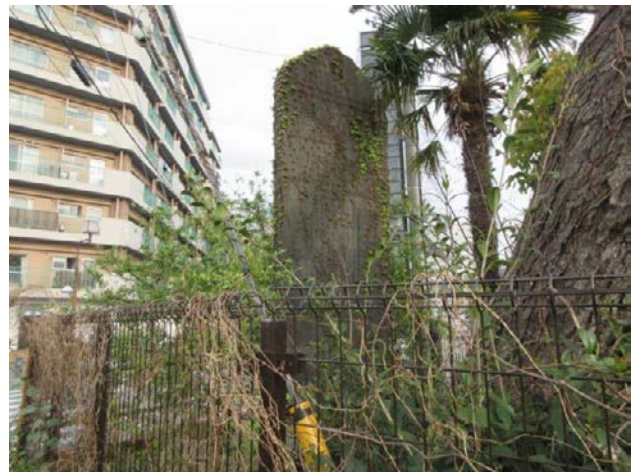


図 2-b. 現在の川口耕地整理碑の写真

Fig.2-b The photograph of the present memorial stone.

川口市教育委員会文化財課が読み取った石碑の碑文(書き取ってワードに入力したもの)が残されており、提供して頂くことができたので、以下に記す。なお、石碑正面については、図 2-a や図 2-b を参照しながら碑文を再確認し、誤字を修正した上で記している。「/」は改行を示す。出力できない旧字は新字で表す。

<正面碑文>

川口耕地整理碑 埼玉縣知事正五位勲四等丹羽七郎篆額/川口之地在武蔵國東南部隔荒川對東京府鐵路與官道劃其東西市街殷賑多產鐵器夙有金山之稱儼為帝都北郊之中枢然平行卑濕頗闕交通運搬之便若夫大雨一到則泥濘沒脛商賣輦于市農夫於野他方未見其比也有志/之徒深以為憂相議欲整理田畝永救濟之合隣邑橫曾根及青木之一部以七/十町歩為一團設耕地整理組合大正十三年三月得其允及芝崎平七為之長/永瀬長次郎為之副岩田武三郎岡村彦次郎濱田熊次郎岩崎恒治銳意處辦其事晨夜展力工善吏勤至昭和五年三月竣工所費十七萬一千餘金道路溝/渠固平如某局車馬來往與物資運搬亦悉其便矣況沮洳變為良疇濕澤化/為沃野收益歲增人煙日密輦者賀嘆者歌濼濼之聲滿于市雍口之音溢於野/市制之基始立矣於是組合各員賴其惠咸相慶將刊其事於石以傳永遠來索/余文夫富國莫先於農與工馬設使海內諸邑皆如斯而不已則田野日墾民產/月加國雖不富得乎哉余幸承之本縣勸工興業以圖殖產固余之職也故不/辭而叙之繫銘辭與之銘曰/墾闢成功 整地靖民 偕得福利 一鄉依仁/ 金山之

内 荒水之濱 貞石千歳 以告後人／昭和六年一月
埼玉縣耕地課長正六位前川純三撰／埼玉縣書記兼
耕地協會主任中里久藏書

<裏面(上段)碑文>

事業概要／整理前の土地／民有地総反別 六十三町八反一畝二十九歩／國有地総反別 三町四反九畝十六歩／官有地総反別 一町四反九畝十九歩／整理後の土地／民有地総反別 五十八町九反五畝五歩余／國有地総反別 十二町二反五畝二十三歩／官有地総反別 一町五反六畝十八歩／総工費金十七万一千余円／川口町補助金 金 四万九千余円／日本麥酒株式会社寄付金 五千元／川口町へ提供シタル記念敷地 五反一畝十歩

石碑の裏面の下段には、組合員 100 人の名前が記されていたとのことである。

前述の沼口(1979)には、旧川口町の震災当時の記録写真が掲載されている。図 3-a は、旧本町通り(現在の JR 川口駅東口、駅前から直線状に延びる道路)の、倒壊した民家の惨状を写した 1 枚である。前述の『埼玉県北足立郡大正震災誌』に記されている旧川口町の具体的な被害状況を物語っている。一方、図 3-b は、JR 川口駅東口の駅前の歩道橋上から撮影した現在の川口本町大通りの風景である(2019 年 2 月 18 日に撮影)。震災の当時、民家だけであった通り沿いは、オフィス街になっており、ビルが立ち並んでいる。



図 3-a. 関東地震で民家が倒壊した本町通りの写真
Fig.3-a The photo of damaged houses by the Kanto Earthquake in the “Honmachi avenue”.



図 3-b. 現在の本町通りの様子

Fig.3-b The photo of the present “Honmachi avenue”.

この他に、倒壊した川口尋常高等小学校(現在の川口市立本町小学校)の校舎、倒壊した本町 1 丁目の民家(初代川口市長宅)と蔵、錫杖寺(川口市本町 2-4)の半壊した鐘楼等の写真が掲載されている。また、『北足立郡大正震災誌』に記されている「救護物資の配給」の様子(2 棟が倒壊した川口尋常高等小学校の校庭)や、鋳物工場の屋根越しに東京方面の火災で湧き立つ雲を記録した写真も残されている。

3.3 青木村(青木氷川神社)に建つ御大典記念碑に記されている震災と再建

本研究では、川口市内に残る震災に関する石碑も大切な記録の1つと考え、川口市教育委員会(1977)を調査した。その結果、青木氷川神社(川口市青木 5-18)に「御大典記念碑(大震災仆壊による拝殿・鳥居等再造の記念)」が建てられていることがわかった。現地を訪れてみると、社殿に向かって右側にその石碑が建てられていた。正面の下段(図 4 の白丸で囲まれた部分)に、震災に関する碑文が縦書きで次のように記されている。「/」は改行を示す。出力できない旧字は新字で表し、読み取りが困難な文字は○で表す。

大正十二年九月一日未曾／有の大震あり村社其／
○尤も甚し当社鳥居／及び拝殿倒壊し外建／物大
破す氏子各戸も亦／惨害を極む然れども／氏神を奉
仕する念は益／々厚く相寄り相議りて／御大典を期
し再築し併／せて社務所を建設す／神徳福高きを仰
ぎ／天壤無窮聖寿萬／歳を祈り奉る



図 4. 青木氷川神社に建つ石碑

Fig.4 The memorial stone built in the Aoki Hikawa shrine.

石碑の裏面には、「寄附金連名」として、7 段にわたって寄附者の旧市町村名と氏名、寄付金額(合計 7396 円)が記されている。この石碑は、1928(昭和 3)年に建立された。石黒・他(2015)による石碑の調査で、埼玉県さいたま市の久伊豆神社(岩槻区大字谷下 102 番)にも、1928 年に「御大典記念社殿再築之碑」が建てられている。この昭和天皇の「御大典」に、関東地震によって被害を受けた建物を改築した寺社も多くあったと考えられる。

3.4 旧鳩ヶ谷町における被害と震災後の都市計画

旧鳩ヶ谷町は、関東地震の揺れによる家屋の倒壊数は 24 軒(全壊率 2.1%)と、前述の旧芝村や旧川口町と比べると、数字上の被害は小さい。しかし、本震の発生から一ヶ月程後に書かれた手紙が残されており、それによると局所的に強い揺れによる甚大な被害が生じたことが伺える。一方で、旧川口町のように耕地整理もおこなわれ、震災後の都市化につながり、そのことが記された石碑が建てられている。本章では、これらの記録について順に記述する。

3.4.1 震災直後に書かれた手紙(葉書)

本震の発生から一ヶ月ほど後の 1923 年 10 月 4 日に旧鳩ヶ谷町で投函された葉書に、被害の状況が詳しく記されている。この葉書は、旧鳩ヶ谷町の船津輪輔氏が、当時の東京府南足立郡江北村沼田の船津輪爾氏に宛てて記したものである。この葉書は、川口市立文化財センター分館 郷土資料館に現物が保

管されており、閲覧させて頂き、写真(図 5-a, 図 5-b)を撮影させて頂くことができた。

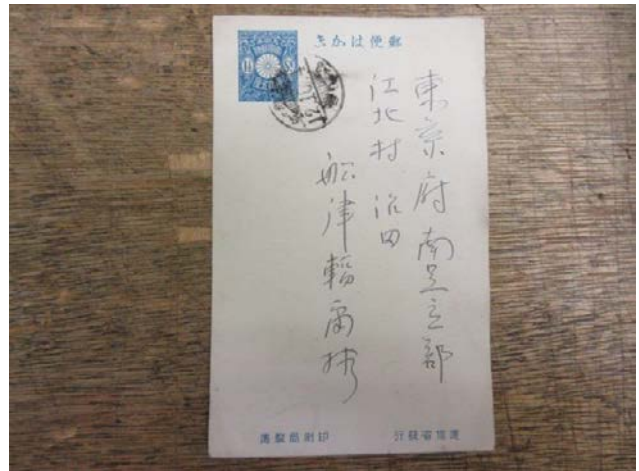


図 5-a. 震災の直後に書かれた手紙の表面

Fig.5-a The front surface of the postcard written just after the 1923 Kanto Earthquake.

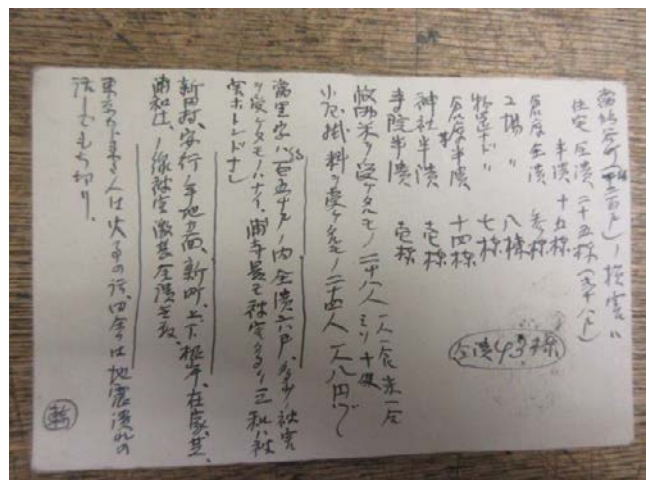


図 5-b. 震災の直後に書かれた手紙の裏面

Fig.5-b The back surface of the postcard written just after the 1923 Kanto Earthquake.

葉書の裏面には縦書きで下記のように記されている。「/」は改行を示す。漢数字と算用数字、()等は現物のまま記す。

當鳩谷町(約千二百戸)ノ損害ハ/住宅全潰 二十五棟(式十八戸)/半潰 十五棟/倉庫全潰 參棟/工場 八棟/物置ナド 七棟/倉庫等半潰 十四棟/神社半潰 壹棟/寺院半潰 壹棟/救助米ヲ受ケタルモノ二十八人 一人一食米一合/ミン十匁/小屋掛料ヲ受ケタルモノ二十四人/一人八

円ツツ／當里字ハ約百五十戸ノ内全潰六戸、多少ノ被害ノヲ受ケヌモノハナイ、浦寺最モ被害多ク三和ハ被ノ害ホトンドナシ 新田村、安行ノ平地方面、新町、上下根岸、在家、芝、ノ浦和辻、ノ線被害激甚全潰無数、ノ東京から来た人は火事の話、田舎は地震潰れのノ話しでもち切り、ノ 輪

あわせて葉書の裏面には、横書きで「全潰 43 棟」と記されている。この文面は、「船津金松家文書 No.16」として、鳩ヶ谷郷土史会(2007)と加藤(2008)にも引用されている(一部、現物と表記が異なっている)。

葉書の文面から、差出人の船津輪輔氏は里(現在も存在する地名)に住んでいたことが分かる。被害を受けないものはなかったと記されている里地区と、最も被害が大きかったと記されている浦寺地区は、ともに旧鳩ヶ谷町の北西部に位置し、それぞれ旧青木村と旧神根村に隣接する。また、被害がほとんどなかったと記されている三つ和地区(葉書の中では「三和」と記されている)は、里地区から1km程南東側の、旧鳩ヶ谷町の南部に位置する。つまり、同じ旧鳩ヶ谷町内でも、地区によって家屋の倒壊率には顕著な違いがあったと考えられる。

3.4.2 耕地整理碑

鳩ヶ谷市(1992)によると、関東地震の発生から2年5ヵ月後の1926(大正15)年に、1回目の耕地整理がおこなわれた。その後、2回目、3回目と段階的に、1932(昭和7)年にかけて進められた。川口市坂下町2丁目の富士見橋のたもとに、正面の上部に碑銘「永寿嘉福」が(旧字体で)記された石碑(図6)が建てられている。現地で碑文を読み取ったところ、正面には次のように記されている。「ノ」は改行を示す。旧字で出力できない漢字を新字で表す以外は、そのまま記述する。

鳩谷耕地整理碑 埼玉縣耕地課長從五位勲六等前川純三篆額ノ大正十五年二月北足立郡鳩谷町内田竹蔵等請官設耕地整理組合刻高埋低ノ晨夜力墾工善吏勸始起殖産之基焉昭和二年六月山崎友七等次設第二組合ノ明年十一月船戸彰等亦設第三組合並手偕作至七年六月竣工凡所得地積八ノ十一町有奇其所費九萬八千餘金区劃井然交通之利灌排之便皆得其宜而道ノ路平坦如砥秦莽變為沃壤於是一郷感激爭就其業田疇日關戸日月殖其功績ノ顯著世構為整田臣擘焉方今國用窘迫農邨疲弊嗚呼此一挙盖

可請匡救時弊ノ之策也然創業者易守成者難克全整田之業其責固在郷民而被其惠澤者亦在ノ郷氏則郷民豈可不甞而勉焉手哉今茲組合員胥謀欲建碑以貽後昆請余文余ノ以興其事尤深乃叙其大要系以銘曰關地殖産 家給人足 鳩谷之郷ノ移風易俗 蔚為市街 百貨攢續ノ偉哉諸子 永傳芳躅ノ昭和八年三月 埼玉縣書記中里久蔵撰文平野政一郎書石長鏑

この石碑の裏面には、4段にわたって、「埼玉県耕地課長」以下、耕地整理に携わった計78人の氏名が記されている。§3-2で記述をした「川口耕地整理碑」と同様、碑文に「震災」や「復興」といった文字は記されていないが、碑銘の「永寿嘉福」は長生きと幸運を祈願した言葉である。そのことから、旧鳩ヶ谷町の耕地整理に携わった第1、第2、第3組合の人々の、震災を乗り越えて復興させるにとどまらず、町のさらなる発展と、町が末永く栄え続けることへの願いが込められた碑である可能性が考えられる。川口市・川口市郷土史会(1973)には、川口市域でも1923年関東地震による損害を契機として、都市的街路の整備を図る機運が生じ、政府の勸奨策にも耕地整理による道路の整備が始まったことが記されている。



図6. 坂下町の富士見橋のたもとに建つ耕地整理碑
Fig.6 The memorial stone built near the Fujimibashi Bridge, Sakashita Town, Kawaguchi City.

3.5 上記以外の旧村に関する震災の記録

上記の旧町村以外の、旧安行村、旧戸塚村、旧神根村について、関東地震による被害に関する記録が残されている。

長島彦太郎氏所蔵の文書「関東大地震実記」(川口市(1983)および川口市(1988)に引用)によれば、

旧安行村では、家屋の倒壊だけでなく、農作物の被害も甚大であった。領家付近の水田では、稲が揺さぶられて水没し、刈り取りを断念した農家も多かった。他、産物であった蓮根や慈姑も傷つき作柄が不良であった。また、この文書には、興禅院(川口市安行領家 401)の鐘楼が土台の石から外れて南に傾いたことや、同院の墓地の墓石が殆ど転倒してしまったことが記されている。

藤波(1983)には、旧戸塚村での関東地震の発生時の状況として、「地震は長く続いて揺れるのではなく、一分、二分間隔に揺れがくるので、外に出たまま身動きが出来なかった」と記されている。また、東京の大火災による煙が日中は雷雲のように夜はその煙が赤く見えたことや、南風に乗って東京方面から灰や燃え残った紙が飛んできたことが記されている。

次に、旧神根村内の被害について、臼倉計次氏による「神根村震災記録」(川口市(1983)に引用)には、子日神社(川口市新井宿 155)の社殿角柱が折れて傾き、燈籠も倒れたことが記されている。また、氷川社(川口市西新井宿 352)の拝殿と水屋が全壊し、鳥居が倒壊したことも記されている。

上記の各村の記録には、いずれも、流言飛語によって生じた混乱や警備体制の強化について記されている。流言飛語は、川口市の全域で起こった問題であった。

§ 4. 川口市を含む埼玉県東部の調査結果のまとめ

本章では、著者らがこれまでに調査に取り組んできた埼玉県川口市・さいたま市・春日部市・幸手市に残る 1923 年関東地震に関する記録についてまとめる。§ 3 までに記述をした川口市域の記録、および各市域に残る石碑(石黒・他(2014, 2015), 荒井・他(2017a), 篠田・他(2018))や、関東地震の直後に震災の体験者によって記された作文(荒井・他(2017b), 篠田・他(2018))から、埼玉県東部に共通して次のようなことが伺える。

まず、神奈川県や東京都に比べると本震の震源からは少し離れているものの、局所的には強い揺れ(現在の気象庁震度階級で 6 強以上)に見舞われて、そのような地域では家屋の倒壊が多くあった。逆に、同じ市内であっても、地盤の特性の違いから震度が比較的小さかった地域(同震度階級で 5 弱以下)もあった。一方で、震度が比較的小さかったにもかかわらず、多くの人々が犠牲になった事例も無視できない。旧大宮町では家屋の倒壊による犠牲者はいなかったもの

の、当時の鉄道省大宮工場(現 JR 東日本大宮総合車両センター)では、煉瓦づくりであった高さ約 24m の工場の煙突が倒壊し、その下で休息をしていた 24 名が亡くなった(石黒・他(2015)に関連する石碑を記述)。

東京都や神奈川県と異なり、埼玉県東部の各市域では、大規模な火災が発生した記録は 1 つも残されていない。それでも、東京方面の火災による被害について、詳しく記された碑文や作文が多数ある。東京方面の大火災によって、南の空が赤く染まっている様子や上空に立ち昇った雲に関して記されている記録も多く見られる。

本震の発生から数日間の人々の動きについても、多くの記録から読み取れる。多くの避難民が、東京方面から荒川を超えて、埼玉県東部の各市域に移動している。また、各地で流言飛語による混乱も起こった。さいたま市内では、井戸に毒を流した等の流言飛語を信じた民衆が朝鮮人を殺害してしまう事件が発生した(石黒・他(2014)に関連する墓石を記述)。

各市域において、郷土愛の強い人々が協力し合って、震災から復興に向けて積極的に動く姿も見ることができた。また、震災の記憶や教訓を風化させることなく後世へ語り継ごうという気持ちで記された碑文や作文も多くあった。

最後に、本震の直後から数日間続いた活発な余震活動も、各市域の記録に残されている。断続的に発生した余震によって、幾晩も蚊帳を用意して家の外で過ごしたという旨の記述がある。また中には、本震から数分後に発生をした余震によって倒壊した家屋に関して記された記録も残されている。それらの記述から、当時の人々の余震による苦悩を読み取れる。

関東地震の発生(11 時 58 分)の直後には、大きな余震が連続して発生している。本震から約 3 分後の 12 時 01 分に発生した東京湾北部を震源とするマグニチュード 7.2 の余震、12 時 03 分に発生した山梨県東部を震源とするマグニチュード 7.3 の余震などである。武村(1999)によると、これらの余震による埼玉県での被害の報告は少ないとされている。それでも、『芝村誌』の記述のほか、例えば篠田・他(2018)による『幸手町のかたりべ』の中に、「本震で 1 階、余震で 2 階が潰れた」、「2, 3 回目の余震で家が潰れた」といった記述があり、余震によって被害が拡大した可能性を示唆している。このことは、篠田・他(2018)に、「2 日夕方の余震で町では何件か潰れた」、「2 日夕方にあった余震で家屋倒壊が続出し、幸手町立尋常小学

校の西校舎が倒壊した」という記述からも伺える。本震による揺れで耐震性が低くなっている建物は、余震によって被害を受ける危険性があることを、常日頃から認識しておく必要がある。

§ 5. おわりに

本研究では、現在の川口市域における 1923 年関東地震による具体的な被害について、旧町村毎に把握をすることができた。また、活発な余震活動のことや、流言飛語の問題といった、埼玉県内の他の市を対象とした調査で得られた結果と重なる部分も見出すことができた。地震(本震)が発生した直後の素早い救援活動、復旧や復興を協力し合って進めた体制、災害が忘れた頃にやってくることで後世に伝え残そうとする姿勢も、今後の防災を考える上で大切にしたいことである。

謝辞

川口市教育委員会 文化財課 文化財保護係には、旧川口町に建っていた耕地整理碑の碑文を提供して頂くとともに、石碑の移設先等の情報を教えて頂いた。川口市教育委員会 生涯学習部 文化財課の学芸員の出野雄也氏には、震災直後に書かれた手紙(葉書)の現物の閲覧にあたって、ご協力を頂いた。青木氷川神社の方々には、石碑の読み取り調査に便宜をはかって頂いた。栄東中学校の藤井聡氏と栄東高等学校の宮崎雅芳氏には、石碑の碑文の文字(漢字)の判読にご協力頂いた。栄東中学校の Lawrence A. Dow 氏には、本稿の英文のチェックを丁寧にして頂いた。著者らの所属する理科研究部の島村泉里氏、野間鉄心氏、遠藤匠人氏、西岡怜那氏、上村勇輔氏、林春太郎氏、広川周作氏、長澤啓太氏には、本稿の校正に協力をして頂いた。編集をご担当頂いた加納靖之氏および査読者の諸井孝文氏による助言は、本研究を一層充実させるためにたいへん役立った。本研究は、武田科学振興財団より採択頂いた研究助成(高等学校理科教育振興奨励)により実現した。記してお礼申し上げる。

対象地震:1923 年関東地震

文献

荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017a, 埼玉県春日部市に

残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震, 32, 77-86.

荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017b, 埼玉県春日部市に残る 1923 年関東地震に関する記録 ~大震災記念児童文集と大正 12 年粕壁町震災写真帳~, 歴史地震, 32, 103-106.

藤波昌明, 1983, 改訂版 戸塚村, 206pp.

鳩ヶ谷郷土史会, 2007, 郷土はとがや, 59, 鳩ヶ谷郷土史会会報, 136pp.

鳩ヶ谷市, 1992, 鳩ヶ谷市史 通史編, 989pp.

石黒喬大・荒井賢一・西山享佑・安倍聡志・平原優美・増田滉己・浜橋一徳・齋藤隆・木村円香, 2014, 埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震, 29, 111-128.

石黒喬大・荒井賢一・小林優介・西山享佑, 2015, 埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑その 2, 歴史地震, 30, 139-148.

加藤信明, 2008, 郷土はとがやの歴史, 和泉屋, 118pp.

川口市, 1983, 川口市史 近代資料編 1, 1106pp.

川口市, 1988, 川口市史 通史編 下巻, 726pp.

川口市・川口市郷土史会, 1973, 川口の歴史, 16pp.

川口市教育委員会, 1977, 川口市内金石文調査報告, 川口市文化財 調査報告書 7, 85-159.

川口市芝地区震災対策推進協議会, 1980, その時!あなたは 関東大震災体験記, 川口市芝地区震災対策推進出版, 125pp.

川口市商工会議所, 2006, 川口の記憶 70 年の軌跡, 川口市出版, 62pp.

小泉安太郎, 1937, 芝村誌, 芝村役場出版, 254pp.

見沼土地改良区, 1988, 見沼土地改良区史 資料編, 656pp.

諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集, 2, 3, 35-71.

諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 4, 4, 21-45.

内務省社会局, 1926, 大正震災志. 上, 第 8 篇 埼玉県, 1123-1174.

沼口信一, 1979, 写真集 明治大正昭和 川口, 国書刊行会, 166pp.

沼口信一, 1989, 長徳寺《川口》, さきたま出版会,

37pp.

埼玉県北足立郡役所, 1925, 埼玉県北足立郡大正
震災誌, 昭文堂, 467pp.

埼玉県北足立郡, 1981, 埼玉県北足立郡大正震災
誌, 大和学芸図書, 467pp.(1925年刊の復刻版
として)

篠田海遥・野間鉄心・荒井賢一, 2018, 『幸手町のか
たりべ』に記された埼玉県幸手市における 1923
年関東地震, 歴史地震, 33, 220-236.

武村雅之, 1999, 1923年関東地震の本震直後の2つ
の大規模余震 —強震動と震源位置—, 地学
雑誌 Journal of Geography, 108(4), 440-457.

武村雅之・諸井孝文, 2002, 地質調査所データに基
づく1923年関東地震の詳細震度分布 その2
埼玉県, 日本地震工学会論文集 第2巻, 2,
55-73.